

地唄「名護屋帯」雑感

鈴城 雅文

逢ふて立つ名が 立つ名の
内か
逢はで焦れて立つ名こそ
まこと立つ名のうちなれや
思ふ仲にも隔ての襖
あるに甲斐なき捨小舟

（二代目嵐三右衛門作詞）の
冒頭から。

ジョン・ソルトの英訳では、
この「立つ名」は「honours」と
なっていて、「うまい」と
唸った。なるほど「立つ名」
とは「うわさ」のことであっ
たか。そのことがわかれば、
「名護屋帯」はするすると解
けそうだ。

許されぬ恋に身を焦がす
「おんなごころ」。一行目の
「逢ふて立つ名が立つ名の内
か」には、逢いたい相手に逢
うことが許されない女の、せ
めてもの強がりが見え出
ている。逢瀬のうちに立つ噂
ぞ、たいしたものじゃないよ
というのだ。

強がりは二行目と三行目で
いっそう激しさを増す。「逢
はで焦れて立つ名こそまこと
立つ名のうちなれや」と。「逢
はで焦れて立つ名」を、ほん
とくに聴くようなら、もはや
「恋の病」ではなく、ほんま
の幻聴病だから、きつと医
者が必要になるだろう。
けれども意味の上からは理
不尽に見えるこの強がりが、
かえって「彼女」の心のうち
の深すぎる哀しみを映す鏡と
なる。この鏡が前掲されてい

るからこそ、四行目と五行目
が、みごとに切なく響きはじ
めるのだ。

思ふ仲にも隔ての襖
あるに甲斐なき捨小舟

ジョン・ソルトの、超英訳
に助けられて、ここまで書い
た。くやしいから「あら捜し」
を、ひとつだけ。友情とは、
そういうものだ、うそぶき
つこの「思ふ仲」をソルト博
士は、within my love
thoughtと訳した。つまり
「思ふ中」と。これは博士の
責任ではなく、翻訳時のテク
スト原文の誤りだ。ここで
の「なか」は、「彼女」の頭の
「中」ではなく、女と男の「仲」
だろう。

思いを寄せ合う、女と男の
「仲に」、「隔ての襖」、「襖」
というところが、憎い。超え
られそうだが、超えがたく…
たぶんこれが「隔てのコンク
リート」や「隔ての鉄壁」だっ
たら、さすが「彼女」の思い
も、焦がれるのではない、消
沈したはずではないか。「ある
に甲斐なき捨小舟」も、また
憎い。とことん朽ち果せて、
舟の象を失ってしまえば、
やつと未練も断ち切れそう
なのに。

嵐三右衛門、厳つい名をし
た男が、やわらかな「おんな
ごころ」を、捏造したのだ。

美紗の会に入門して…

縄岡 好人

今年の二月に西松布咏先生
に三味線の構え方、撥の持ち
方から稽古をつけていただく
ようになって八ヶ月がたちま
した。

その間、白金台の稽古場、
八芳園、入谷、青山荘などで
三味線を聴いたり演奏したり
する機会を与えていただきま
したが、部屋が大きすぎや内装
仕上げなど建築空間の違いに
よって三味線の音が変わるの
にいまさらながらに驚いてい
ます。稽古場でピンピン鳴っ
ていたはずの私の三味線の音
が、ゆかたざらいの会場だっ
た青山荘では往つたきりで
戻ってこない感じで何か頼り
なく、ついつい手にも力が
入ってしまひなかなか思うよ
うに動きません。無論、私の
腕のせいでもあるとは思って
いますが、その結果は…：相方
の方申し訳ありませんでした。

江戸時代に端唄や小唄の舞
台であったお座敷は、窓や扉
が吸音性の障子や襖の木造建
築であり、しかも開けっ放し
で演奏されることが多かった
ようなので、空間としての響
きは全くないと言つて良いぐ
らいだったと想像されます。
演奏者は屏風を舞台上の音響
反射板として利用しながら響
きのない音場で、暗闇に消え
るはかなさや無限を繊細に表
現していたのでしょうか。あ
る音楽評論家は、「三味線音楽
の妙味は、詞のたけに合わせ
た節回しの微妙な揺れと、唄
い手の細くて折れてしまひそ

うな声の細工にあり、か細い
声は三本の糸とつかず離れず
心のひだにしみ込んでいく。」
と書いています。
これまで五十〜六十年代の
ジャズが好きでよく聴いてい
たのですが、三味線を始めて
みて、邦楽の表現の奥深さに
惹かれながらも、つかず離れ
ずと言いか、ずれているよう
でずれていない邦楽の間の取
り方の難しさに戸惑っている
現状です。しかし、即物的で
人工的な音かともはやされて
いる時代に、三味線を通じて
江戸の粋やスローバラードに
接することは私にとって他の
何物にも代えがたい贅沢のよ
うな位置づけで、ほんまに今
のめり込んでいます。

金沢でのひととき

十月十一日

鏡花の世界展記念イベント
池水 美都

布咏師匠の公演を聴くため
に、高校時代の友人を道連れ
に、十月の金沢に向かいまし
た。金沢は、穏やかな陽気、金
沢市中心部にこぢんまりとし
た佇まいをみせる泉鏡花記念
館は、鏡花が幼少時代を過ご
したという生家の跡に建てら
れたもの。完成してまだ間も
ないのではありませんかと思
わないの。完成してまだ間も
その清潔な建物には、展示室
の他に中庭と「講座室」とい
う名の二室があり、今回の公
演はこの「講座室」に小さな
舞台を設けて行われまし
た。刺き出しの梁、高い天井
紫の座布団が三十枚程床全
面に敷き詰められると足の踏
場もなくなるような小さな会
場は、最後に客で観客で埋ま
り、まさに雰囲気も密な空間
となりました。

今回披露されたのは「滝の
白糸」（新内）と田中優子さ
んの詩を師匠が曲をつけたとい
う「幻のお二重」（歌行燈より）
の二曲。赤い毛氈の上に座し
た師匠は、じくじく聞き入る観
客とはほぼ同じ目の高さ。か
返りの空近距離。声は静まり
み込み、三味線の響きもまた
格別でした。鏡花については
不勉強な私ですが、個人的に
は前衛的でむしろ過激なイ
メージを強く抱いていたので
三味線と唄だけで紡ぎ出され
た「滝の白糸」にはまた違っ
た印象を、発見しました。記
念館から程近くにある「ひがし
茶屋街」へ繰り出しました。
師匠とご縁があるという目当
てで「福嶋三弦店」は、あいに
く休業だったので「懐華」
楼（金沢市指定保存建造物）
でお茶を一緒に飲ませました。
きました。昭和初期まで営業
していた茶屋を改装したた
うだけあって、朱塗りの階段
壁一色が朱色の部屋、青い部
屋、金畳の茶室、と部屋ごと
に異なる装飾が見事。狭い渡

り廊下を芸妓気分歩き回り
嬉々としてしまいました。特
に着物姿の愛らしい師匠が
「私こういふ雰囲気大好きな
のよね」とデジカメを手にき
るくると嬉しそうに動き回り
写真に収まっていた姿も忘れ
られません。抹茶と蕎麦、饅頭
でも美味でしたので、美紗の会
でこれからは金沢に出かけられ
る方にはおすすすめです。機
があれはぜひお立ち寄りくだ
さい。

お知らせ

昨年開催された田中優子先
生による資生堂サクセスフル
エイジング講座「いくつもの
人生」が求龍堂より「江戸の
意気」のタイトルで全国書店
にて発売されています。
多才なタレント 松岡正剛、
西橋健、北山修、ジョン・ソ
ルト、篠田正浩氏に続き、西
松布咏の「三味線で聴くいく
つもの人生」で弾き語りや交
えながらの対談や想い出の写
真が掲載されています。
いさぎよく「古い」を生きて
たくさんのヒントが盛り込
まれている「江戸の意気」は
是非読み下さい！
定価 二二〇〇円

編集後記

NHK 青山荘で、九月七日
第二十六回美紗の会を開催し
冷や汗をかきながら、和やか
な時を過ごしたが、和やかな
のようになり今年のカレン
ダーもいよいよ大詰めとなっ
てまいりました。
そこで十二月五日（金）七
時より「ゆく年」に想う人生の
あれこれ、絹の唄声、情の糸
と銘うって、わが美紗の会、西
松布咏が「シルクソウル霜月」
に出演いたします。
銀座の句肴「素処」にての
年忘れ小宴がついての楽しい
集いに皆様ふるってご参加下
さいませ。
大久保